

## アジア・太平洋研究センター主催セミナー

日 時：2009年2月22日（日）・23日（月）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：インドネシア・イスラームのダイナミズム

### 第一セッション「社会活動とムスリム女性」

報 告 者：大形里美（九州国際大学准教授）

小林寧子（南山大学教授）

塩谷もも（東京外国語大学非常勤講師）

コメント：嶺崎寛子（日本学術振興会特別研究員）

### 第二セッション「クルアーン学習の変容」

報 告 者：中田有紀（名古屋大学大学院）

小杉麻李亜（立命館大学大学院）

コメント：服部美奈（名古屋大学准教授）

### 第三セッション「イスラーム主義の展開」

報 告 者：野中葉（慶應義塾大学大学院）

見市建（岩手県立大学講師）

佐々木拓雄（久留米大学准教授）

コメント：小杉泰（京都大学教授）

### 第四セッション「植民地支配下のイスラーム」

報 告 者：國谷徹（愛知大学非常勤講師）

菅原由美（天理大学講師）

コメント：青山亨（東京外国語大学教授）

世界最大のムスリム人口を抱えるインドネシアでは、イスラームはどのような展開を見せているのか。このセミナーでは、草の根レベルでは何が起きているのかを多角的に検証することを試みました。「イスラーム地域研究」は従来の東南アジア研究に弱かった「交流」「比較」という視点が強く要求されますが、中東イスラーム研究者を討論者に迎えて活発な議論が行なわれました。

要 旨

第一セッション「社会活動とムスリム女性」

第1報告 「ジェンダーの視点からみた  
伝統派イスラームと近代派イスラーム」

大形里美  
九州国際大学

従来、インドネシアのイスラームは、20世紀初頭に確立した近代派イスラームと伝統派イスラームという枠組みで語られることが多かったが、近年はそれに新たな思想潮流が加わっている。同国では1970年代以降、リベラル派の思想潮流が市民権を確立していく一方、大学のモスクを拠点として活発化した布教活動に、中東留学を終えた布教者たちが入り込んでいくことでサラフィー主義思想（預言者ムハンマドとその後三世代までを理想とし、宗教テキストの字義的解釈を特徴とする）が浸透し発展していった。この新たなサラフィー主義思想は、イスラーム国家建設を明確に主張する潮流から、政治活動に無関心な潮流まであり、一様ではない。しかし宗教テキストの字義的解釈を重視し、女性の服装コードに厳しく、女性の権利を制限する点では共通する。

本報告では、伝統派イスラーム、近代派イスラームの諸組織（ムハマディヤー、DDII [インドネシア・イスラーム布教評議会]、MMI [インドネシア・ムジャヒディン協議会]、ポンドック・ゴントル [近代派のプサントレン]）、新たなサラフィー主義運動の諸組織（HTI [インドネシア解放党] や PKS [福祉正義党]）について、それぞれのジェンダー規範の比較作業を通して、それらの間に見出される共通点と相違点を検証した。リベラル派のイスラーム思想は本報告の比較対象からは除外した。

近代派イスラームを代表するムハマディヤーのジェンダー規範は、同じ近代派イスラームに属するポンドック・ゴントルやDDII、MMIなどのジェンダー規範に比べ、より緩やかだ。後者は、マフラム以外の異性との握手をハラムとし、女性の政治活動や社会活動を明確に制限する点で、新たなサラフィー主義運動のジェンダー規範と共通する。またこれらの組織は、一夫多妻をする際に、妻の合意を条件とする必要性を認めない点でも共通している。一方ムハマディヤーは、異性との握手をタブー視せず、女性が国家元首になることも含め、女性の社会活動や政治活動を特に制限しない。また一夫多妻については完全には否定しないが「非常口」とする立場をとる。キヤイの手にキスをする慣行のある伝統派イスラームでは、サラフィー主義の組織と同様、女性の社会活動を制限するハディースを教え、プサントレンではさまざまなタブーはある

が、組織として女性の社会活動や政治活動に明確な制限を設けることはしていない。

上記の比較作業を通じて、一部の近代派イスラム組織のジェンダー規範が、近年のサラフィー主義思想のそれと親和性が高い厳格なものであることが明らかとなった。このように厳格なジェンダー規範をもつサラフィー主義思想であるが、最近 PKS の幹部から一夫多妻に否定的な考えを示すウラマーが出てきたことなどを考慮すれば、今後、サラフィー主義思想が、土着化のプロセスの中で変化していく可能性も十分あると考えられる。

## 第2 報告 女性の社会的役割をめぐるイスラーム法学見解 ——ナフダトゥル・ウラマーを中心に——

小林寧子  
南山大学

ファトワ（インドネシア語ではファトワ）は、ウラマー（法学者）が一般信徒のムスリムの質問に対してイスラームの教義に則った解決法を示す回答である。法学見解、法学裁定とも言える。質問は神学上の問題から日常生活で直面する問題まで多岐にわたり、通常、法的拘束力のない「助言」の形をとる。ウラマーは、イスラーム法発見の方法論に基づいて判断を下すが、ファトワにはイスラームの価値規範とムスリムが置かれた現実社会の状況が反映されていると考えられる。

インドネシア国内最大のムスリム団体、ナフダトゥル・ウラマー（NU）は、1926年の結成時より法学検討フォーラムを組織してファトワにあたる「法学決定」を出し続けてきた。2006年に刊行された『NU法学決定集』には2004年までの法学決定435件収録されている。同時に、1992年から特によく議論される問題に関して出された法学検討の指針23件も収録されている。1960年代までの文書のオリジナル性などに若干の問題はあるが、法学決定の年代が約80年にわたって確定されており、その時代のムスリムが直面する問題を知る上で貴重な資料である。同様の問題が何度も質問され、ウラマーが新しい事態に対処するにつれ、その社会観に変化が見られる。ファトワはウラマーとウマツト（ムスリム社会）との対話で成立するとも言える。

昨今注目を集めるイスラームにおける女性の問題に関する法学決定も、全部で90件にも達する。内訳は婚姻・親族関係など家族法関係の問題が8割以上、女性の社会活動に関するものが2割弱である。婚姻関係の問題は1960年代初頭まで古典的イスラーム法古を踏襲した見解が出されたが、その後は医学の進歩と絡まる問題以外は質問されなくなった。一方、女性の社会活動に関しては、独立を機に政治への参加を容認して、大きな可能性を開いた。最終的には1990年代末に、法学検討の指針として

イスラームの平等・公正の精神が強調され、従来の男性優位の観念が文化の影響により今述べたイスラームの精神から逸れていることが認識された。同時に、女性のジェンダー公正の実現には従来の神学理解に再解釈が必要であること、男性偏重の文化理解を批判的に検討すること、女性を差別する政治を変革することの必要性が確認された。

このように、女性の社会参加に関しては、ウラマーは社会の変化、時代の要請に比較的開けた姿勢を見せるが、家族問題に関しては見解を出さなくなっている。これには、婚姻法の成立（1974年）や知識の普及などが影響しているが、家族法は古典法との継続性が強いために革新的な見解が出しにくいという事情もある。一方、ムスリム女性組織からはジェンダー公正への要求は高まり、ウラマーの家族に関する理念、従来の夫婦観が大きな挑戦を受けていることも、その大きな原因であると思われる。

### 第3報告 「ジャワの儀礼変化にみるイスラーム意識の高まりと「効率化」：女性に焦点をあてて」

塩谷もも

東京外国語大学非常勤

ジャワにおける儀礼の変化を、イスラーム意識の高まり、効率化という2つの現象から、女性に焦点をあてて考察することを目的とする。儀礼の日常的な面に着目しながら、ジャワにおける地縁に基づく社会関係とイスラームのつながりに関する分析を行う。

ジャワの儀礼を対象とした先行研究の多くは儀礼の場に注目しており、儀礼準備の場に関して十分な分析をしてこなかった。また、儀礼の非日常的な面を重視したため、日常的な面についての分析が不足してきた。儀礼準備の場は日常的な要素が強く、社会関係の考察に不可欠なものである。本発表では、儀礼と儀礼準備の場の両方に注目し、イスラームとの関連から地縁に基づく社会関係を考察する。中部ジャワ・スラカルタ地方において実施した現地調査で得られたデータを用い、事例を中心に分析する。調査地は、いわゆる閉ざされた農村でなく、流動性に富む郊外の一町内会で、住民のイスラームの「派」も多様である。日常の中でコミュニティ活動は、以前は地縁単位で行なわれるものが中心であったが、近年ではイスラームに基づくものが活発化してきている。

儀礼変化は、儀礼の場の変化と儀礼準備の場の変化に区分することができる。儀礼の場の変化は、イスラームの強調という形をとり、非イスラーム的とされる要素を排除し、イスラーム的とされる要素を付け加えるという現象が起こっている。現地の

人々も儀礼の場の変化については、イスラームに結びつけた説明をする。また、イスラーム的とされる変化については、実際には効率化につながる面もあるが、その点はあえて強調されない。

儀礼準備の場の変化は、その多くが効率化と結びついており、時間の短縮や準備の手間の軽減化という形をとり、具体的にはケータリングの利用などがあげられる。また、効率化に加え、隣人が中心となっておこなってきた儀礼準備の場に、イスラームの派に基づくつながりを持つ人々が入るといった現象も起こっている。

儀礼の場の変化は、イスラーム意識の高まり、イスラーム的であることへの関心の高まりを反映した面が大きい。そのため、儀礼の場の変化はイスラームに結び付けられ、肯定的な評価がなされる。その一方で、儀礼準備の場の変化は効率化に結び付けられ、地縁に基づく関係が形成・維持される場が失われるという点から、否定的な評価がなされることが多い。しかしながら、現地の人々が説明するほどに2つの現象は明確に分かれておらず、両者が絡み合っている面もある。イスラームに基づく結びつきが重要性を増す中で、儀礼を通じた地縁に基づく社会関係にも変化が生じてきている。

## 第二セッション「クルアーン学習の変容」

### 第1 報告 「インドネシアにおける国家教育制度法の改正とクルアーン学習」

中田有紀  
名古屋大学大学院

インドネシアでは、スハルト政権の崩壊後、中央集権体制から段階的に地方分権体制へ移行してきた。国民教育制度も地方分権化され、教育は、基本的に県および市の所管となった。1989年に制定された国家教育制度法も、分権化後の2003年に改正された。新しい法制のもとで、それぞれの地域の実情にあったさまざまな教育が、国家教育の担い手となることが期待されている。

1989年から約10年の間に、クルアーン学習施設が全国に急速に普及した。従来クルアーン学習では、個々の教師に任され、クルアーンの読誦・暗誦とともに礼拝の仕方などの基本的なイスラームの規範や倫理が学ばれた。クルアーン学習法（速習法）『イクロ』の普及とクルアーン学習施設の開設と発展によって、その状況は大きく変わった。2000年には、クルアーン幼稚園や児童教室などのクルアーン学習施設は、全国で5万ヶ所以上に増加した。また、2004年に出版された小学校1年生用のイス

ラーム教育の教科書（「教科書イスラーム（小学校1年生用）」ユディスティラ社）では、学校以外でイスラームについて学ぶ場として、小学生のためのクルアーン学習施設（クルアーン児童教室 TPA；Taman Pendidikan Al-Qur'an）が登場する。日常生活のなかでも、クルアーン学習施設が身近にある光景が一般的なものとなった。

急速に全国に普及したクルアーン学習施設とそこでの教育は、国家教育のなかで、制度的にどのように位置づけられるようになったのか。本発表では、2003年国家教育制度法と、宗教教育および宗教専門教育に関する2007年政令第55号の規定から、イスラーム教育をめぐる制度上の問題を考察する。

2003年国家教育制度法の第30条および第37条に基づいて定められたのが、宗教教育および宗教専門教育に関する2007年政令55号である。宗教教育と宗教専門教育の定義に加え、さまざまな宗教専門教育について言及されている。

クルアーン学習施設をはじめとする宗教専門教育は、これまで教育法制上、正式な位置づけは与えられてこなかった。しかし政府は、国家教育の充実と発展を目指すなかで、クルアーン学習施設に対する関心を高めてきた。クルアーンの読誦方法の学習を国家教育基準に基づくイスラーム教育の内容に加えたことから、クルアーン学習施設およびそこでの教育が国家にとって重要な役割を担うべき存在であるという認識が、うかがえる。

## 第2報告 「インドネシアにおけるプラチックとしてのクルアーン ——日常発話からグッズまで——」

小杉麻李亜  
立命館大学大学院

本報告では、イスラームの聖典であるクルアーン（コーラン）がムスリム社会の日常生活の中に現われている現象を取り上げ、以下の3点について検討したい。すなわち、(1)フィールドワークにもとづく地域間比較によってどのような事例群が確認されるのか、(2)東南アジアと中東の間にはどのような共通性や違いが見られるのか、(3)地域間の共通性や違いを含めて、それらの事例はどのような枠組みの中で分析されるのか、である。

フィールドワーカーがムスリム社会に一步足を踏み入れた途端、クルアーンは人びとの生活の中に埋め込まれた生き活きとしたかけがえのない細部として立ち現れてくる。家々の壁にはクルアーンの章句が描かれた掛物や皿、カレンダーが飾られ、暁前のモスクからはクルアーンの朗誦が聞こえる。街の店頭でも朗誦のカセットが流され、人びとはモスクや個人によって開かれる読誦や朗誦の教室に通う。村レベルから

国際レベルまで、さまざまな規模のコンクールが開催される。礼拝や日々の祈り、葬儀ではクルアーンの章句が唱えられ、病気の予防や治療、護符にも使われる。人びとの会話の中でも章句が引用され、携帯電話の待ち受け画面にも章句が現れる。

クルアーンは人びとの生活の中で、貼られ、飾られ、身に付けられ、語られ、引用され、つぶやかれ、吟じられる。このようにフィールドにおいて多種多様な形態で現われているクルアーンはどのように理解することができるであろうか。「クルアーン・グッズ」を中心とした事例に即して考えてみたい。

クルアーンは暗記され朗読される聖典であるが、フィールドワークをおこなっていると、安価でコンパクトな刊本ムスハフの普及やCD、カセット、ラジオ、テレビを通じた朗読の受容の定着、朗読コンテストの流行などが現代的な展開として注目される。その一方、聖典の章句があしらわれたさまざまなガジェットの存在が目を引く。それらは聖典の発現形態のひとつでありながら、安価な——しばしば質的にもチープな——グッズとして金銭で売買され消費される（キーホルダー、バッジ、ステッカーなど）。この事例について、(1)可視的に現われるクルアーン、(2)実際の使用傾向、(3)聖具からガジェットへ、(4)オーラルのマテリアル化、という4つの点から議論する。

### 第三セッション「イスラーム主義の展開」

#### 第1 報告 「大学におけるダアワ運動の成立と展開 ——サルマン・モスクの事例を中心に——」

野中葉  
慶應義塾大学大学院

インドネシアの大学生たちによるダアワと呼ばれるイスラーム運動は、近年のイスラーム台頭の一形態として、あるいは、躍進するイスラーム政党、福祉正義党の誕生と発展を促した要因として、注目されている。また、バンドゥン工科大学のサルマン・モスクが、学生によるダアワ運動の発祥の地であり、全国的な影響力を持ったことは、すでに複数の研究の中で指摘されている。本報告では、これまでの研究業績を踏まえ、サルマン・モスクの運動を大学のダアワ運動の原点と位置づけ、フィールドワークによる複数の当事者へのインタビューや、運動で使われた資料などを用いて、その成立と展開の過程を明らかにする。また、運動の中心的存在であったイマドゥディン・アブドゥルラヒムの著作と、彼が主宰したダアワのトレーニングの内容を検証し、学生たちが運動を通じて学んだイスラームの中身や、彼らにとってのダアワやイスラームの意味を考察する。

サルマン・モスクは、歴史ある国立大学、バンドゥン工科大学に隣接する土地に、学生の働きかけによって建てられた、国内で最も古い大学モスクの一つである。1950年代半ば、学生らによるモスク建設運動としてスタートしたサルマン運動は、資金不足や、イスラームの伸張に対する大学や社会からの警戒など、様々な困難を乗り越えながら、1972年ようやくモスクの完成に至る。その後、イマドゥディンを中心として、ダアワを担う人材を育てる短期間の集中トレーニングが定期的実施され、全国の大学から参加者が集まるようになった。

イマドゥディンが強調したのは、タウヒードの重要性である。信仰や崇拜の対象を一つにすること、つまり、人間がアッラーだけに、全身全霊で従うことが、イスラームの教えの根幹であることを示し、人間が神のように振舞うこと、また逆に、アッラー以外の物を神格化して隷属することを厳しく批判した。これは、当時のインドネシアの指導者の傲慢さと民衆の怠慢に対する、暗黙裡の批判でもあった。イマドゥディンは、学生たちのイスラームへの覚醒を促し、現状や体制への不満を、イスラームの学習とダアワの実践に向けることを呼びかけた。自己の信仰を深め、周囲のイスラーム性を高めることで、より良い社会を築くという道筋を提示した。

1978年にイマドゥディンは逮捕されるが、80年代前半にかけ、サルマンでは、より幅広い層に対する多様なプログラムが展開し、その名声は全国に広まっていった。しかしその後は、イマドゥディンという精神的支柱を欠き、組織が硬直化し、学生たちへの継続的な支援が不足し、さらに新たな潮流の流入なども原因となって、次第にその影響力が低下していった。

学生たちが重視したのは、サルマン・モスクという場ではなく、サルマンから始まったダアワの実践であった。サルマン・モスクが、全国の学生たちを先導する時代は終わったが、サルマンで培われたダアワとタウヒードの精神は、後の学生たちにも受け継がれ、大学のダアワ運動の新たな展開と全国的な拡がりをもたらしている。

## 第2報告 「イスラーム主義出版にみる イデオロギーの適応と「溶解」

見市建  
岩手県立大学

本発表の目的は、イスラームに関する出版動向の観察を通して、現代インドネシアのイスラーム主義の変遷を明らかにすることである。1970年代末以降、世界的なイスラーム主義の潮流はインドネシアにおいても興隆した。主要イデオログの著作は翻訳され、多くの学生に読まれた。本発表は出版業の担い手や出版市場の変遷に注目



し、イスラーム主義がどのような人々によって広められ、どのような著作が世に送り出されたのかを分析する。またイスラーム「主義」出版に続いて拡大してきた、より一般的なイスラームを扱った書籍や雑誌市場を概観することで、イスラーム主義の位置づけを明らかにする。現代インドネシアの社会にイスラーム主義がいかに適応し、ときにイデオロギーがいかに「溶解」していったのか。党員が活発な出版活動を行っている福祉正義党を主たる対象に分析する。

イスラーム主義出版の先駆けとなったのは、1979年にバンドゥン工科大学のサルマン・モスクの出版部として設立された Pustaka [図書] である。Pustaka はサイイド・クトゥブなど主要イデオログの著作を翻訳したが、同時に政教分離論やシニア派との比較論、リベラルな思想も紹介した。1980年代には多数の出版社が登場したが、タルビア（教育）と呼ばれる学生の宣教運動出身者が設立したイスラーム主義出版社が一大勢力となった。タルビアはムスリム同胞団をモデルとし、出版物も同胞団系のものがほとんどであった。1998年にスハルト体制が崩壊すると、彼らは正義党（現在の福祉正義党）を結成、出版社の経営者たちは党幹部となった。

1998年以降、政治的なテーマで急速に部数を伸ばしたのは雑誌 Sabili [道] である。ピーク時には隔週で11万部にまでになった。武装闘争派の出版社も中ジャワ州ソロを中心に多数台頭した。しかし、イスラーム出版市場は多様化し、現在は Sabili の売り上げも落ち込んでいる。福祉正義党系の As-Syaamil [完全] はイデオロギー色の強い党員向けの教本と共に、イスラームに自覚的な都市中間層向けの幼児教育書や少女小説を多数発行している。

イデオロギー政党である福祉正義党は2004年選挙で躍進したが、その後直接選挙となった地方首長選挙で世俗政党とも連立を組んで「普通政党化」が囁かれている。実際に、同党が流すテレビコマーシャルはあからさまにナショナリズムに寄り添うようになり、イスラーム主義のイデオロギーは「溶解」したかのようである。党の人気を支える若い女性たちも政治的イデオロギーにさほど関心があるようには思えない。しかし、2007年発表の党指針や内部向けに公開されたタルビアの創始者ラフマツ・アブドゥラの伝記映画を分析すると、少なくともイスラーム共同体の一体性の強調と、漸進的なイスラーム化の推進という基本理念は維持されている。

### 第3報告 「反・反イスラーム主義」の功と罪 ——アフマディヤ問題をめぐって——

佐々木拓雄  
久留米大学

ムハンマド以後の預言者の存在と教えを信じるイスラーム教団アフマディヤに対して、スハルト後に擡頭した急進派イスラーム主義の諸団体は批判を強め、幾度も迫害行動に及んだ。これを背景に、2005年にはウラマー協議会がアフマディヤ解散を促すファトワを掲げ、2008年6月には、政府側から「合同決定書（SKB）」が発表された。合同決定書の内容は、アフマディヤのイスラームとしての存続は認めながらも、その布教活動の停止を言い渡すというものであった。この政府の介入と措置について、国内外の多数の論者が、憲法で定められた信仰の自由を侵すものとして批判し、民主主義の破綻やインドネシアの神政国家への変容を指摘した。だがはたしてそのような見方は妥当なのか。

本報告は、ユドヨノ大統領を含めた中道派イスラームの長期的動向をめぐり関心と被害当事者であるアフマディヤ協会内部への視点から、合同決定書の意義や歴史的的位置づけを捉えなおすものである。合同決定書を取りあげた各種記事や報告書、合同決定書発表の後にいったアフマディヤ関係者への聞き取り調査の結果などを整理するとともに、それらを報告者自身がこれまでの研究において用いてきたインドネシア政治の分析枠組みと照らし合わせて検討する。その際の主要概念となるのが「反・反イスラーム主義」である。

イスラーム主義にも、世俗主義（あるいはイスラーム・リベラリズム）にも与することなく、イスラームの解釈をめぐり問題については留保の姿勢を保つという「反・反イスラーム主義」は、ユドヨノ現政権の基本路線であり、その柔軟さと高度な多元主義が、混迷期インドネシアの社会統合を可能にしてきた。そしてアフマディヤ問題への対応も、実際には民主主義の破綻やイスラーム主義への屈服などとはいえず、この基本路線を踏襲したものとなっている。政府の宗教問題介入に対する政教分離派からの批判は厳しいが、多様な宗教勢力、世俗勢力が政治の領域でひしめく民主化以後のインドネシアにおいて、ある次元までの政府の介入は安定と社会統合維持のために不可避であり、またその結果、正統派イスラームのヘゲモニーやドミナンスが露出するのも必然だといえる。合同決定書をめぐりアフマディヤ協会内部の声を探ると、布教活動を停止させられたことへの不満や落胆が存在するものの、他方で、政府による「保護」や「抜け道」の用意、それらと並行して暴力の取り締まり強化が行われたことに対する安堵もみられる。

むろん、このような政治路線には負の側面も存在する。形式主義と排他主義の広がりを抑止できず、そのため公共宗教としてのイスラーム（宗教）の普及のスペースが十分に確保されてこなかったというのがこの場合の問題であり、これを解消するには、スハルト流の強権的な政教分離政策を再び志向する選択肢しか見当たらないというジレンマに、現在のインドネシア政治は直面している。

## 第四セッション「植民地支配下のイスラーム」

### 第1報告 「19世紀末のインドネシアにおけるメッカ巡礼者数の地域的差異：植民地統計の分析から」

國谷徹  
愛知大学非常勤

本報告では、19世紀末から20世紀初頭までの蘭領東インドからのメッカ巡礼に関して、オランダ植民地政府が収集した各種の統計史料の分析を行う。

19世紀末以降のメッカ巡礼者の増加は、従来の研究では一般に、「急増した」という事実のみが単純に指摘され、様々な社会的・宗教的变化の要因として言及されることが多かった。しかし実際には、巡礼者数の推移は様々な要因に左右され、地域ごとにその増減のパターンは一様ではなかった。

当時オランダ植民地政府当局は、毎年、の巡礼に出発した人数だけでなく、巡礼から帰国した人数や州・県ごとの巡礼者数の推移、各州に在住する「ハジ」の称号を持つ人物の数など、メッカ巡礼に関する様々な種類の統計を収集していたが、それら統計史料は従来ほとんど利用されてこなかった。本報告ではこれらの統計の分析によって、当時のメッカ巡礼の活発化の実情をより多面的に明らかにしようと試みる。

また、これらのメッカ巡礼者に関する諸統計は、19世紀末のオランダ植民地政府にとって、植民地におけるイスラームの存在、影響力を数量的に把握するほとんど唯一の手段であり、植民地社会におけるムスリム共同体の存在を最も可視的に提示するものであった。従ってこれらの統計の分析は、植民地国家の側からイスラームがどのように見られ、認識されていたのかを明らかにするという目的でもある。

主として利用する史料は、植民地政府の年次行政報告書 (Koloniaal Verslag) に加えて、在ジェッダ・オランダ領事館が外務省および東インド政府に提出した各種報告である。これらに含まれる統計史料から、以下の諸点について分析する。

第一に、ジャワと外領（主にスマトラ）の2地域に分けて毎年、のメッカ巡礼への出国者数・帰国者数の推移を比較する。巡礼者数の増減パターンの比較分析に加えて、

出国者数と帰国者数の推移における両地域の差異を明らかにする。

第二に、主に在ジェッダ領事館におけるパスポート査証数をもとに、理事州および県単位での巡礼者数の比較を行う。ここでは、いくつかの主要な理事州・県ごとに人口比での巡礼者数とその推移を比較分析する。

第三に、植民地報告書の人口統計において「ハジ」というカテゴリーで集計された人数とその推移を、理事州ごとに分析する。人口比でのハジの割合や、同じ人口統計における「村落首長」の人数との比較によって、ハジの社会的プレゼンスの大きさを探る。

## 第2報告 「インドネシア・タレカット研究史再考 ——インドネシア近代史研究と写本学——」

菅原由美  
天理大学

19世紀、オランダ植民地体制下でありながら、東インドからメッカ巡礼者の数は緩やかに増加し続け、この傾向は20世紀初頭になって、さらに加速した。この間、イスラーム学校やタレカットは増加し、イスラームに関するテキストも増加した。しかし、現地の著名なウラマーがアラビア語や現地語でイスラームに関するアラビア語文献の翻訳や解説などの著作を残し始めた17・18世紀と、改革派イスラーム団体が誕生する20世紀初頭に挟まれた19世紀は、イスラームを主眼においた研究において等閑視されている。ムハマディヤに代表される改革派の誕生は、インドネシアの、特にジャワのイスラーム史に新しい頁を加え、その後ジャワ社会において「改革派」対「伝統派」対立を生じさせた。そして、このとき、改革派イスラーム団体の成立をインドネシアのイスラーム史の分水嶺のごとく扱う見方が生まれ、19世紀以前を「未覚醒の時代」として表現する研究まで現れた。

これまで19世紀ジャワ史研究においてイスラームは主に、宗教指導者が反乱の指導者として登場することによって言及されてきた。しかし、そうした反乱が社会を変えていく要因になるとは考えられておらず、抵抗運動の参加者達は、オランダの植民地支配に抵抗しながらも簡単に鎮圧されていく無力な存在としてしか扱われていない。またこのとき、イスラーム思想が抵抗運動の参加者に与えた影響はほとんど考察されてきていない。総じて、イスラームと社会の関係は不鮮明なままである。19世紀から20世紀初頭のジャワにおける、オランダ植民地統治に対する現地人による抵抗運動研究の第一人者であるインドネシア人歴史学者、サルトノ・カルトディルジョの研究においても、この傾向は顕著である。サルトノは、一連の抵抗運動研究のなか

で、この時期に頻発した数多くの抵抗運動をケースごとに社会的・経済的・宗教的原因から説明し、当時のジャワ社会の多様な社会状況を描き出した。サルトノは、この時期の抵抗運動を組織・行動・思想面から見た場合に、まだ「未熟な」ものであると結論付けていた。タレカットに代表されるイスラーム的要素が（図らずも）抵抗運動に「村」や血縁を超えた広がりを持たせることに成功している事例があるとはしながらも、それ以外の点において、「近代」的運動にいたる前段階であると考えていた。サルトノの念頭にあったものは「近代」というゴールであり、そこにいたるまでの過程を描いたのが彼の歴史叙述であった。このような歴史観に立った時、タレカットは依然として前近代的存在でしかなかった。

本発表は、そうした抵抗運動研究やインドネシア・イスラーム研究におけるタレカットの見方を念頭に置いた上で、これらの研究のなかにでてくるタレカットの、特に19世紀後半～20世紀初頭の歴史について特徴を整理し、この時期にオランダ領東インドで増加したタレカットを、インドネシア近代史のなかにどのように位置づけることができるかを検討する。また、近年のインドネシア写本学でのタレカット研究傾向についても検討する。



小林寧子センター長



第一セッション



第二セッション



第三セッション



第四セッション



レセプションの様子